

ムジークコレギウム・ヴィンター トウアのジルベスターコンサート

10月28日から50人以上のイヴェントを禁止されたスイス音楽界は、無観客でも公演をライブ配信して、その存在を主張していかなければならない現状を受容し始めたようだ。

個人的にいちばん鳥肌が立ったのはムジークコレギウム・ヴィンタートウアのジルベスターコンサートだった。次シーズンから首席指揮者に就任するロベルト・ゴンザレス・モンハスが嬉しそうな笑みを浮かべながら登場し、ファンバーディンク「ヘンゼルとグレーテル」序曲」が始まった。ストリーミングでは音楽が平面的に聴こえ、ライヴの躍動感が伝わりにくいのだが、この演奏は音楽のフレーズが膨らむさまが手に取るようにわかる。演出付きの舞台を観ているようにワクワクするのだ。ホルンをはじめとする管楽器がすばらしく、オンラインでこれだけゾクゾクさせられた演奏は初めてで、涙が出そうになった。

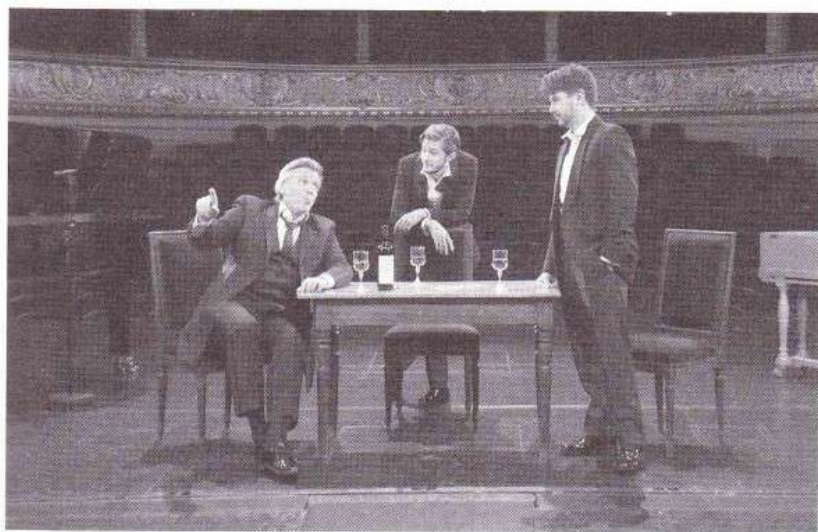
続くチャイコフスキー《なつかしい土地の思い出》。弦楽合奏版では弾き振りしたが、初めのヴァイオリン・ソロでは雄弁さが足らず、音楽の吸引力に欠けた。しかし、オーケストラと交わる部分での息の合わせかたは絶妙だ。弓を押し付けず、フレーズをたゆたわせて弾く部分は、ポエティックで表現力豊かな美しさが出る。「スケルトン」でもオーケストラを自由に引く張っていくパワーと、挑戦的なアツチエレランドや強調されたアクセントなどでの絶妙な息の合わせかたで、ゴージャスな演奏だった。「メロデー」では甘い旋律に溺れず、躍動感を保っていた。

しかし、期待が昂まったあとのチャイコフスキー《くるみ割り人形》は、「小序曲」では豪華な出だしのもと、薄っぺらになってしまった。そして《鉛の兵隊の行進曲》では出だしのフレーズが毎回速滑りになり、《花のワルツ》も超速で、とくに3拍目に落ち着かないため、実際のバレエ公演ならばバレリーナたちは踊りにくいだろう。フレーズの保ちかたに問題があるようだが、指揮者は踊りが苦手なかもしれない。最後はルロイ・アンダーソン《そり滑り》と《クリスマス・フェスティヴァル》で重苦しかった2020年を楽しく締めくくった。

元日はザンクト・ガレン交響楽団のニューイヤール・コンサートもライブ配信され、楽しめた。J・シユトラウスらのワルツ・プログラムだったため、お祝い気分浸れたのだが、その数時間前にテレビ放映されたウイーン・フィルハーモニー管弦楽団のワルツが残っている耳には厳しい。ストリーミングでの選曲における課題が浮き彫りになった。

カーテンコール

コロナ禍の恩恵を受けたような企画もあった。チューリヒ歌劇場は過去の公演数本と共に、年末年始には「カーテンコール」という、オペラ・スタジオ生と現役歌手4人のプログラムとその舞台裏の映像を、1〜3週間に配信した。これは意外なほど質が高く、記録としても重要だ。チューリヒ歌劇場友の会60周年記念公演がコロナ禍で中止されたことにより、多くの目に触れ、練り



『カーテンコール』のスクリーン・ショットから

返し見られる形態で紹介された今期のスタジオ生は幸運だ。また、4人の歌手の芸術性と人柄が見えて、ファンも増えることだろう。いちばん多くを学んだのはトーマス・ハンブソンのクラスではないだろうか。ドイツリートのほか、モーツァルト《ゴジ・ファン・トゥット》の第9場までを、ハンブソンがドン・アルフォンゾとして共演した。音楽性のみならず、連動したイタリア語の際立たせかたがすばらしく、チェンバロ奏者が弾き振りするような室内オーケストラをバックに、ドン・アルフォンゾを歌いながら、残りの5役の指導も担当。その他、自国文化としてのドイツリー

トを指導したディアナ・ダムラウ、一流テノールが演じるマントヴァ公爵、ウエルテル、デ・グリユーと共演する醜態を体験させたベンジャミン・ベルンハイム、女性が内面から男役になり切る姿や、決して出すぎることはない完璧なアンサンブルの一部となる芸術性を見せたアンナ・ボニタティウスと、それぞれの持ち味が惜しみなく発揮されていた。

トーンハレ管の チャイコフスキープロジェクト

1月22日には、約3カ月ぶりに無聴衆の舞台に戻ったチューリヒ・トーンハレ管弦楽団がライブ配信した。新音楽監督パオロ・ヤルヴィの下で始まったチャイコフスキープロジェクトはコロナ禍で停止していたが、昨年に発売されたCD第1弾「交響曲第1番《冬の日の幻想》」と「幻想曲《フランチェスカ・ダ・リミニ》」の好評に後押しされる形で再開されたという。

《戴冠式祝典行進曲》は冒頭の豪華なサウンドが涙を誘ったが、管楽器が飛び出しすぎたり、奥行きが出なかったり、ティンパニの高揚感も感じられず、弦の広がりにも欠けたのはストリーミングの限界か。

《イタリア奇想曲》は洒落感がなかったが、流麗な旋律は上手い。「タランテラ」以降は最後までうまくまとめた。最後の「交響曲第1番《冬の日の幻想》」がいちばん説得力のある仕上がりになっていた。

ほか、去る12月11日に創設75周年を迎えたチューリヒ室内管弦楽団の演奏会のラジオ放送が拡散されたり、11月30日聖ペーター教会で行われたアンドラーシ・シフのチャイコフスキープロジェクトの模様がライブ配信されたりした。